

BOOK Review

プロメテウス解剖学 コア アトラス 第3版

評者

徳田 信子 獨協医科大学教授・解剖学マクロ



美しい。まず心を惹かれるのは、圧倒的な美しさである。もしかしたら、美しすぎるかもしれない。少なくとも、実際のヒトの身体に本書のように鮮やかな彩りは無い。昔の教科書のごとくモノクロの濃淡で示す方が、ヒトの姿に近いのかもしれない。それでも、今、この美しさは必要だと思う。

アトラスを手取る読者のほとんどは、医療者の卵である。ヒトの身体を知るための長い道のりを歩み、その向こうにある診断や治療の学びをめざす。かつて自分が解剖学を学んだ頃は、文字情報と少しの図を頼りに、友人たちと相談しながら実習に取り組んでいた。今も、それを理想の学び方だとする意見もある。しかし、進む方向がわからず、解剖学の入り口で力が尽きてしまう学生も多く見てきた。本書は、ページをめくるたびに、さまざまな方向・深度から見た美しい構造物が現れる。もし、何もわからずに出発しても、ページの進みに合わせ、知らず知らずのうちに身体を巡る歩みへ誘われる。

学生が順調に歩き始めたとしても、道に迷うことがある。図に惹かれて読み進め、ふと振り返った時、学びのポイントを見失っていることに気付く。来た道を戻り理解して再び歩み始めるには大変な労力が必要である。本書

は、そんな場所で、そこまでの数ページのポイントをまとめた「表」が登場する。理解しながらじっくり読み進めた学生であれば、そこで知識が整理できる。ぼんやり見てきた学生も、表を参照して図を振り返り、学びの道を補正できる。本書はアトラスでありながら、「読む」テキストとしての役割もしてくれるのである。

もう1つ、学ぶ道のりの半ばで心が折れてしまうことがある。それは、学ぶ意義を見失う時。ヒトの身体を知ること大切だと誰でも知っている。ただ、解剖学の学びは、「この知識はいつかどこかで役に立つ」という気持ちで乗り切れるような量ではない。本書は、そんな気持ちをくみ取るかのように、とてもいいタイミングで「臨床BOX」という至れり尽くせりのコラムが備えられている。もちろん、試験前で時間が無い時なら読み飛ばせる。「この学びは医療者にとって大切な知識である」という確信を得ながら読み進めていけば良いのだ。

人類に火をもたらしたプロメテウス。火のおかげで夜が明るくなり、人類は獣たちを凌駕する存在になったと言われる。本書が、次世代の医療を担う学生たちの灯火となり、病と人々を癒やせる存在として成長させる一助となることを期待している。

坂井 建雄 監訳、市村 浩一郎・澤井 直 訳

A4変型判/768頁/2019年/定価(本体9,500円+税)/ISBN978-4-260-03535-4/医学書院刊